

【 復活のトロパリ 第3調 】

てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの  
 天在者樂 地在者

よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら  
 悦 主 其 臂 力 顯

わして、しをもってしをほろぼし、ふ復  
 死 以 死 滅

くかつのはじめとなり、われらをぢごく  
 活 首 我 等 地 獄

のはらよりすくい、せかいにおおいな  
 腹 救 世 界 大

るあわれみをたまいたればなり。  
 憐 賜

【 迎接祭のトロパリ 第1調 】

おんちようをみちこうむるしょうしんどうていぢよ  
 恩 寵 満 被 生 神 童 貞 女

よ、よろこべ、なんぢよりぎのひハスハわれ  
 慶 爾 義 日 我

らのかみ、くらやみにあるものを  
 等 神 幽 暗 在 者

てらすしゅはかがやきいでたればなり。  
 照 主 輝 出

ぎなるおきなよ、なんぢもたのしめ、  
 義 翁 爾 樂

なんぢわがたましいのきゅうしゅ、われらにふく  
爾我霊救主我等復

かつをたもうものをいだきたればなり。  
活賜者抱

【 三歌齋經のコンダク 第1調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、  
光榮父子と聖神歸

かみよ、なんぢがこうえいをもってちにき  
神みよ、爾光榮以地來

たりて、ばんゆうがおののき、ひのかわが  
たりて、萬有が戦ひの火河

しんばんざのまえにひき、きろくがひらかれ、ひ  
審判座前引記録披隱

そかなることであらわれんととき、いたり  
事顯時至

てぎなるしんばんしゃよ、われをきえざるひ  
義審判者我滅火

よりのがれしめて、われになんぢのみぎに  
脱我爾右

たつをえしめたまえ  
立得給

【 迎接祭のコンダク 第1調 】

いまもいつもよよに、アミン。  
今も何時も世世に、アミン。  
ハストスカみよ、なんぢはおのれのこうたん。  
神爾己降誕にてどうていぢよのはらをせいにし、よ  
童貞女腹聖宜ろしきにかないてシメオンのてにふくをく  
合手福降だし、いまわれらのためにすくいをそな  
今我等爲救備えたまえりひとりひとをいつくしむ  
給獨人愛しゅよわがくにをつねにへいわにし、  
主我國恒平和なんぢのあいするきょうかいをかためたまえ。  
爾愛教會固給

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有  
となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾  
り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に  
痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が  
聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる  
ものしゅさいなんぢみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんぢ  
者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の

じんじ もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい  
仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈

からだ せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい  
と 體 とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖

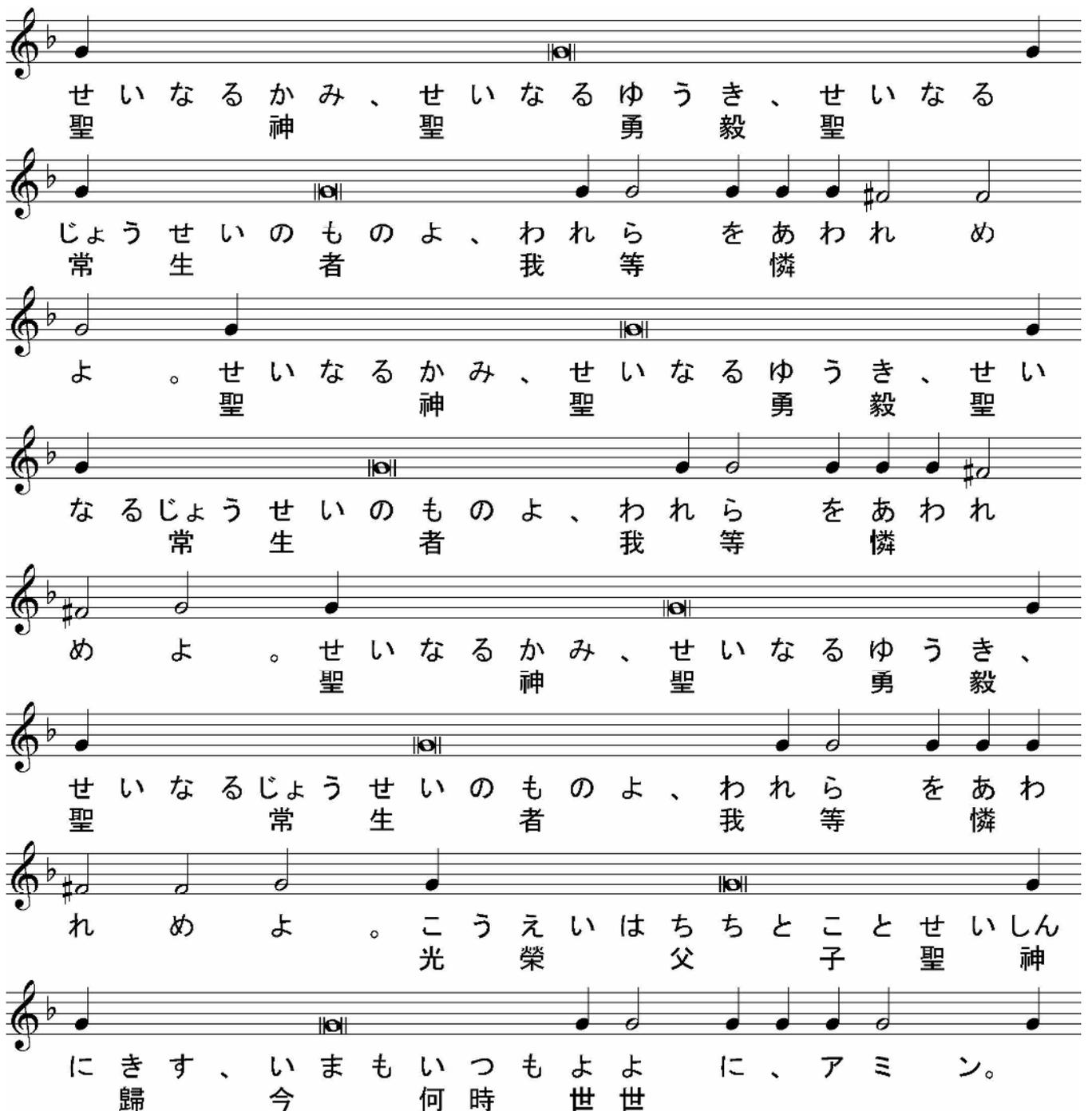
しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょうせいじん きとう よ  
なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ  
蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】



せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
聖なる神聖なる勇毅聖  
じょうせいのもものよ、われらをあわれめ  
常生者我等憐  
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
聖なる神聖なる勇毅聖  
なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
常生者我等憐  
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
聖なる神聖なる勇毅  
せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
聖常生者我等憐  
れめよ。こうえいはちちとことせいしん  
光榮父子聖神  
にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
歸今何時世世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐  
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
 聖 神 聖 勇  
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を  
 毅 聖 常 生 者 我 等  
 あ わ れ め よ 。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 プロキメン 提綱 審判主日の 第3調 及び生神女の 第3調 】

司祭) つつし 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢの神にも、

司祭) えいち 睿智、

誦經) プロキメン、第三の調、吾が主は大なり、其力も亦大なり、其智慧は測り難し、

わ が し ゅ は お お い な り 、 そ の ち か ら も ま た お お  
 吾 主 大 其 力 亦 大  
 い な り 、 そ の ち え は は か り が た  
 其 智 慧 は 測 り 難  
 し 。

誦經) しゅほあ 主を讃め揚げよ、けだしわれらかみうたぜん 是れ樂しき事なり、

わがしゅはおおいなり、そのちからもまたおお  
吾主大其力亦大  
いなり、そのちえははかりがた  
其智慧測難  
し。

だいさん しらべ わ たましい しゅ あが わ しん かみわ きゅうしゅ よろこ  
誦經) 第三の調、我が靈は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。

わがたましいはしゅをあげめ、わが  
我靈主崇我  
しんはわがかみきゅうしゅをよろこべ  
神我神救主悦  
り。

アポストロス  
【使徒經 140 端 コリント前書 8 章 8 節～9 章 2 節 及び 316 端 エウレイ書 7 章 7～17 節】

司祭) えいち  
睿智、

誦經) せいしと  
聖使徒パウエルがコリント人に達する前書の讀、

司祭) つつし  
謹みて聽くべし、

誦經) けいてい しよくもつ われら かみ まえ た けだしわれら くら う ところ くら  
兄弟よ、食物は我等を神の前に立たしめず、蓋我等は食うとも、得る所なく、食  
わすとも、失う所なし。然れども慎め、恐らくは此の爾等の自由は弱き者の躓  
と爲らん。蓋若し人、爾知識ある者が、偶像の廟に坐して食うを見れば、彼弱き者の  
りょうしん かれ ぐうぞう ささ もの くら すす しか なんぢ ちしき よ  
良心は、彼にも偶像に獻げし物を食うを勧めざらんや。然らば爾の知識に因りて、  
よわ けいてい これ ため し ところ もの ほろ なんぢらか ごと けいてい たい  
弱き兄弟ハリストスの之が爲に死せし所の者は亡びん。爾等此くの如く兄弟に對  
して罪を獲、彼等の弱き良心を傷つけて、ハリストスに對して罪を獲るなり。故に若し

しょくもつわ けいてい いざな われなが にく くら わ けいてい いざな ため  
食物我が兄弟を誘わば、我長く肉を食わざらん、我が兄弟を誘わざらん爲なり。

われしと あら われじしゆ あら われ われら しゆ み あら  
我使徒たるに非ずや。我自主たるに非ずや。我イイススハリストス我等の主を見しに非ず

や。爾等は主に於て我の工たるに非ずや。設い我他人の爲に使徒たらずとも、爾等の

ため これ けだしなんぢら しゆ おい われ してしょく いん  
爲には是なり、蓋爾等は主に於て我の使徒職の印なり。

\*\*\*\*\*  
(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、食物は、わたしたちを神に導くものではない。食べなくても損はないし、食べても益にはならない。しかし、あなたがたのこの自由が、弱い者たちのつまずきにならないように、気をつけなさい。なぜなら、ある人が、知識のあるあなたが偶像の宮で食事をしているのを見た場合、その人の良心が弱いため、それに「教育されて」、偶像への供え物を食べるようにならないだろうか。するとその弱い人は、あなたの知識によって滅びることになる。この弱い兄弟のためにも、キリストは死なれたのである。このようにあなたがたが、兄弟たちに対して罪を犯し、その弱い良心を痛めるのは、キリストに対して罪を犯すことなのである。だから、もし食物がわたしの兄弟をつまづかせるなら、兄弟をつまづかせないために、わたしは永久に、断じて肉を食べることはしない。わたしは自由な者ではないか。使徒ではないか。わたしたちの主イエスを見たではないか。あなたがたは、主にあるわたしの働きの実ではないか。わたしは、ほかの人に対しては使徒でないとしても、あなたがたには使徒である。あなたがたが主にあることは、わたしの使徒職の印なのである。

\*\*\*\*\*

誦經) けいてい しょう もの だい もの しゆくふく いつ ろん かつここ じゅう  
兄弟よ、小なる者が大なる者より祝福せらるるは一も論なきなり。且此には、十

ぶん いつ と もの し ひと かれ おのれ こと かれ い しょう もの  
分の一を取る者は死すべき人なり、彼には、己の事を彼は生くと、證せらるる者なり。

またか い じゅうぶん いつ と ところ みづか よ じゅうぶん  
又斯く言うべし、十分の一を取る所のレヴィイは、自らアヴラアムに由りて、十分の

いつ きょう けだし あ とき かれ なおそのちち み あ ここ  
一を供せり、蓋メルキセデクがアヴラアムに遇いし時、彼は尚其祖の身に在りたり。是

もつ たみ しいしよく もと りつぼう う ゆえ も こ しいしよく よ  
を以て、民はレヴィイ司祭職の下に律法を受けたるが故に、若し此の司祭職に由りて

かんぜん う なん また はん したが た しい おこ  
完全なることを得べくば、何ぞ亦メルキセデクの班に循いて他の司祭の興り、アアロンの

はん したが と な もの もち けだししいしよく かわ とき りつぼう またかわ  
班に循いて稱えられざる者を須いん。蓋司祭職の易る時は律法も亦易らざるを

え これら ことば さ ところ もの た しは ぞく すなわちそのうちいちにん さいだん  
得ず。此等の言の指す所の者は、他の支派に屬すればなり、即其中一人も祭壇に

ほうじ しは けだしわれら しゆ い あきらか こし  
奉侍せざりし支派なり。蓋我等の主がイウダより出でしことは明なり、モイセイは此の支

は おい しいしよく こと いつ い そのさら あきらか けだし に  
派に於て司祭職の事を一も言わざりき。其更に明なるは、蓋メルキセデクに似たる

た しい おこ すなわちにくたい いましめ りつぼう したが あら むきゆう せいめい  
他の司祭の興るなり、乃肉體の誠の律法に循うに非ずして、無窮の生命の

ちから したが もの けだししょう いわ なんぢ はん したが しい  
能に循える者なり。蓋證するあり、云く、爾メルキセデクの班に循いて司祭と

な よよ いた  
爲り、世々に迄らんと。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 言うまでもなく、小なる者が大なる者から祝福を受けるのである。その上、一方では死ぬべき人間が、十分の一を受けているが、他方では「彼は生きている者」とあかしされた人が、それを受けている。そこで、十分の一を受けるべきレビでさえも、アブラハムを通じて十分の一を納めた、と言える。なぜなら、メルキゼデクがアブラハムを迎えた時には、レビはまだこの父祖の腰の中にいたからである。もし全うされることがレビ系の祭司制によって可能であったら——民は祭司制の下に律法を与えられたのであるが——なんの必要があって、なお、「アロンに等しい」と呼ばれない、別な「メルキゼデクに等しい」祭司が立てられるのであるか。祭司制に変更があれば、律法にも必ず変更があるはずである。さて、これらのことは、いまだかつて祭壇に奉仕したことのない、他の部族に関して言われているのである。というのは、わたしたちの主がユダ族の中から出られたことは、明らかであるが、モーセは、この部族について、祭司に関することでは、ひとことも言っていない。そしてこの事は、メルキゼデクと同様な、ほかの祭司が立てられたことによって、ますます明白になる。彼は、肉につける戒めの律法によらないで、朽ちることのないいのちの力によって立てられたのである。それについては、聖書に「あなたこそは、永遠に、メルキゼデクに等しい祭司である」とあかしされている。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 審判主日の 第8調 及び迎接祭の 第8調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>きた しゆ うた かみわ すくい かため よ</sup> アリルイヤ、來りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、



誦經) <sup>さんよう もつ そのかんばせ まえ すす うた もつ かれ よ</sup> 讚揚を以て其顔の前に進み、歌を以て彼に呼ばん、



誦經) <sup>しゅさい いまなんぢ ことば したが なんぢ ぼく ゆる あんぜん ゆ</sup> 主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釋し、安然として逝かしむ、



司祭) ( 黙誦：<sup>ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し</sup>人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思  
<sup>ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup>念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠  
<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ</sup>を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ  
<sup>ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup>所を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神  
<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup>よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善  
<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup>にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書106端 25章31～46節 及びルカ福音書7端 2章22～40節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup>睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup>マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) <sup>つつし き しゅい ひと こ そのこうえい もつ もるもろ せい てんし とも きた</sup>謹みて聴くべし、主曰えり、人の子は、其光榮を以て、諸の聖なる天使と偕に來  
<sup>とき そのこうえい ほうざ ざ ばんみんかれ まえ あつま しこう かれ ぼくしゃ ひつじ やぎ</sup>らん時、其光榮の寶座に坐し、萬民彼の前に集り、而して彼は、牧者の綿羊を山羊  
<sup>わか ごと かれら あいわか ひつじ そのみぎ やぎ そのひだり お そのときおう みぎ</sup>より別つが如く、彼等を相別ちて、綿羊を其右に、山羊を其左に置かん。其時王は右  
<sup>あ もの い わ ちち しゅくふく もの きた そうせいらいなんぢら たため そな</sup>に在る者に謂わん、我が父に祝福せられし者よ、來りて、創世以來爾等の爲に備え

られたる國を嗣げ。蓋我が飢えし時、爾等我に食わせ、我が渴きし時、我に飲ませ、我  
 が旅せし時、我を宿らせ、我が裸なりし時、我に衣せ、我が病みし時、我を顧み、我  
 が獄に在りし時、我に來れり。時に義人等彼に答えて曰わん、主よ、我等何時爾の飢  
 うるを見て、食わせ、或は渴くを見て、飲ませしか。何時爾の旅するを見て、宿らせ、或  
 は裸なるを見て、衣せしか。何時爾の病み、或は獄に在るを見て、爾に來りしか。王  
 彼等に答えて曰わん、我誠に爾等に語ぐ、爾等が之を我が此の至と小き兄弟の一人  
 に行いしは、即我に行いしなり。其時又左に在る者に謂わん、詛われし者よ、  
 我を離れて、悪魔及び其使等の爲に備えられたる永遠の火に往け。蓋我が飢えし時、  
 爾等我に食わせず、我が渴きし時、我に飲ませず、我が旅せし時、我を宿らせず、我が  
 裸なりし時、我に衣せず、我が病み、又は獄に在りし時、我を顧みざりき。時に彼  
 等も答えて曰わん、主よ、我等何時爾の飢え、或は渴き、或は旅し、或は裸なる、  
 或は病み、或は獄に在るを見て、爾に事えざりしか。其時彼等に答えて曰わん、我  
 誠に爾等に語ぐ、爾等が之を此の至と小き者の一人に行わざりしは、即我に  
 行わざりしなりと。此等の者は永遠の苦に往き、義人等は永遠の生命に往かん。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 主は言われた、人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて來るとき、彼はその栄光の座につくであろう。そして、すべての国民をその前に集めて、羊飼が羊とやぎとを分けるように、彼らをより分け、羊を右に、やぎを左におくであろう。そのとき、王は右にいる人々に言うであろう、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである』。そのとき、正しい者たちは答えて言うであろう、『主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。また、いつあなたが病気をし、獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか』。すると、王は答えて言うであろう、『あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである』。それから、左にいる人々にも言うであろう、『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいつてしまえ。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず、かわいていたときに飲ませず、旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気のときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかったからである』。そのとき、彼らもまた答えて言うであろう、『主よ、いつ、あなたが空腹であり、かわいておられ、旅人であり、裸であり、病気であり、獄におられたのを見て、わたしたちはお世話をしませんでしたか』。そのとき、彼は答えて言うであろう、『あなたがたによく言うておく。これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわち、わたしにしなかったのである』。そして彼らは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命に入る

であろう」。

\*\*\*\*\*

司祭) <sup>か</sup> <sup>とき</sup> <sup>ふ</sup> <sup>おさなご</sup> <sup>たづさ</sup> <sup>のぼ</sup> <sup>これ</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>たてまつ</sup> <sup>ため</sup>  
彼の時、父母は嬰兒イイススを攜えてイエルサリムに上れり、之を主に奉らん爲なり。  
<sup>しゅ</sup> <sup>りつぼう</sup> <sup>しる</sup> <sup>ごと</sup> <sup>いわ</sup> <sup>およ</sup> <sup>はじ</sup> <sup>たい</sup> <sup>ひら</sup> <sup>なんし</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>せい</sup> <sup>とな</sup>  
り。主の律法に録されしが如し、曰く、凡そ初めて胎を開く男子は主に聖なりと稱え  
<sup>またしゅ</sup> <sup>りつぼう</sup> <sup>い</sup> <sup>ところ</sup> <sup>よ</sup> <sup>ふたつ</sup> <sup>やまばとあるい</sup> <sup>ふたつ</sup> <sup>ひなばと</sup> <sup>まつり</sup> <sup>ささ</sup>  
らるべしと。又主の律法に言う所に依りて、雙の班鳩或は二の雛鴿を祭に獻  
<sup>ため</sup> <sup>み</sup> <sup>な</sup> <sup>ひと</sup> <sup>こ</sup> <sup>ひとぎ</sup> <sup>けいけん</sup>  
げん爲なり。視よ、イエルサリムにシメオンと名づくる人あり、斯の人義にして敬虔なり、イ  
<sup>なぐさ</sup> <sup>もの</sup> <sup>ま</sup> <sup>しこう</sup> <sup>せいしんかれ</sup> <sup>のぞ</sup> <sup>かれ</sup> <sup>せいしん</sup> <sup>よ</sup> <sup>しゅ</sup>  
ズライリを慰むる者を俟ち、而して聖神彼に臨めり。彼に、聖神に由りて、主のハリ  
<sup>み</sup> <sup>さき</sup> <sup>しみ</sup> <sup>しめ</sup> <sup>かれしん</sup> <sup>よ</sup> <sup>でん</sup> <sup>きた</sup> <sup>ふ</sup> <sup>おさなご</sup>  
ストスを見ざる先には、死を見ざらんと示されたり。彼神に依りて殿に來れり、父母が嬰兒  
<sup>たづさ</sup> <sup>これ</sup> <sup>りつぼう</sup> <sup>れい</sup> <sup>おこな</sup> <sup>ため</sup> <sup>い</sup> <sup>とき</sup> <sup>かれ</sup> <sup>おさなご</sup> <sup>そて</sup> <sup>と</sup> <sup>かみ</sup>  
イイススを攜えて、之に律法の例を行わん爲に入りし時、彼は嬰兒を其手に取り、神  
<sup>しゅくさん</sup> <sup>い</sup> <sup>しゅさい</sup> <sup>いまなんぢ</sup> <sup>ことば</sup> <sup>したが</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>ぼく</sup> <sup>ゆる</sup> <sup>あんぜん</sup> <sup>ゆ</sup>  
を祝讚して曰えり、主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釋し、安然として逝  
<sup>けだしわ</sup> <sup>め</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>すくい</sup> <sup>み</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>ばんみん</sup> <sup>まえ</sup> <sup>そな</sup> <sup>もの</sup> <sup>こ</sup> <sup>いほうじん</sup>  
かしむ。蓋我が目は爾の救を見たり、爾が萬民の前に備えし者なり、是れ異邦人  
<sup>てら</sup> <sup>ひかり</sup> <sup>およ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>たみ</sup> <sup>さかえ</sup> <sup>およ</sup> <sup>おさなご</sup> <sup>はは</sup> <sup>かれ</sup> <sup>かん</sup>  
を照す光、及び爾の民イスライリの榮なり、イオシフ及び嬰兒の母は彼に關して  
<sup>い</sup> <sup>こと</sup> <sup>き</sup> <sup>かれら</sup> <sup>しゅくふく</sup> <sup>そのはは</sup> <sup>い</sup> <sup>み</sup> <sup>こ</sup> <sup>こ</sup> <sup>お</sup>  
言わるる事を奇とせり。シメオン彼等を祝福して、其母マリヤに謂えり、視よ、此の子は置  
<sup>うち</sup> <sup>おお</sup> <sup>もの</sup> <sup>た</sup> <sup>お</sup> <sup>また</sup> <sup>おこ</sup> <sup>いた</sup> <sup>かつばくろん</sup> <sup>しるし</sup> <sup>な</sup> <sup>おお</sup>  
かれて、イスライリの中に衆くの者の頹れ又は興るを致し、且駁論の號と爲らん、衆  
<sup>こころ</sup> <sup>おもい</sup> <sup>あらわ</sup> <sup>ため</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>つるぎ</sup> <sup>たましい</sup> <sup>つらぬ</sup> <sup>またよげんぢよ</sup>  
くの心の念の露れん爲なり、爾にも劍は靈を貫かん。又預言女アンナあり、  
<sup>しは</sup> <sup>むすめ</sup> <sup>しよぢよ</sup> <sup>とき</sup> <sup>おつと</sup> <sup>とも</sup> <sup>お</sup> <sup>しちさい</sup> <sup>としおおい</sup>  
アシルの支派ファヌイルの女なり、處女の時より夫と偕に居りしこと七載、年大に  
<sup>お</sup> <sup>よわい</sup> <sup>およそ</sup> <sup>はちじゅうし</sup> <sup>やもめ</sup> <sup>でん</sup> <sup>はな</sup> <sup>ものいみ</sup> <sup>きとう</sup> <sup>もつ</sup> <sup>ちゅうやほうじ</sup>  
老いたり、齡約八十四の癯にして、殿を離れず、齋と祈禱とを以て晝夜奉事  
<sup>もの</sup> <sup>かれ</sup> <sup>こ</sup> <sup>とききた</sup> <sup>つ</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>さんえい</sup> <sup>かつこ</sup> <sup>おさなご</sup> <sup>こと</sup> <sup>およ</sup>  
せし者なり。彼も斯の時來り就きて、主を讚榮し、且此の嬰兒の事を凡そイエルサリム  
<sup>あ</sup> <sup>あがない</sup> <sup>ま</sup> <sup>もの</sup> <sup>かた</sup> <sup>すで</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>りつぼう</sup> <sup>したが</sup> <sup>ことごと</sup> <sup>これ</sup> <sup>お</sup>  
に在りて贖を俟つ者に語れり。既に主の律法に遵い、悉く之を覚えてガリレヤの  
<sup>ふるさと</sup> <sup>かえ</sup> <sup>こ</sup> <sup>ようや</sup> <sup>せいちょう</sup> <sup>せいしんますますきょうけん</sup> <sup>ちえみ</sup> <sup>かみ</sup>  
故邑ナザレトに歸れり。子は漸く成長し、精神益強健にして、智慧充ち、神の  
<sup>おんちよう</sup> <sup>かれ</sup> <sup>のぞ</sup>  
恩寵は彼に臨めり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) それから、モーセの律法による彼らのきよめの期間が過ぎたとき、両親は幼な子を連れてエルサレムへ上った。それは主の律法に「母の胎を初めて開く男の子はみな、主に聖別された者と、となえられねばならない」と書いてあるとおり、幼な子を主にささげるためであり、また同じ主の律法に、「山ばと一つがい、または、家ばとのひな二羽」と定めてあるのに従って、犠牲をささげるため

であった。その時、エルサレムにシメオンという名の人があった。この人は正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。また聖霊が彼に宿っていた。そして主のつかわす救主に会うまでは死ぬことはない、聖霊の示しを受けていた。この人が御霊に感じて宮にはいった。すると律法に定めてあることを行うため、両親もその子イエスを連れてはいつてきたので、シメオンは幼な子を腕に抱き、神をほめたたえて言った、「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりこの僕を安らかに去らせてくださいます、わたしの目が今あなたの救を見たのですから。この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」。父と母とは幼な子についてこのように語られたことを、不思議に思った。するとシメオンは彼らを祝し、そして母マリヤに言った、「ごらんなさい、この幼な子は、イスラエルの多くの人を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしるしとして、定められています。——そして、あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう。——それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためです」。また、アセル族のパヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。彼女は非常に年をとっていた。むすめ時代にとついで、七年間だけ夫と共に住み、その後やもめぐらしをし、八十四歳になっていた。そして宮を離れずに夜も昼も断食と祈とをもって神に仕えていた。この老女も、ちょうどそのとき近寄ってきて、神に感謝をささげ、そしてこの幼な子のことを、エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りかかせた。両親は主の律法どおりすべての事をすませたので、ガリラヤへむかい、自分の町ナザレに帰った。幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みとその上にあった。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ